

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

幻

村の者は家正に敬愛の念を抱き、感謝した。家正は、やっと歩けるようになった彌兵衛を自分の懐に入れて抱き、毎日のように意宇川の堤防を見回った。

「おう、彌兵衛。村の民、百姓が生き生きと働くのを見るのは良いものじゃ。早く大きくなれよ」

家正は幼い彌兵衛に語りかけた。そして、田んぼで農作業をしている村人たちに語りかけた。

「精が出るのお。子や孫が安心して暮らせる村を作るのが、わしらの役目だ。励んで下されよ」「へいへい、そりゃあもう。わしらが安心して仕事に精を出せるのは、みんな庄屋さまのお陰ですけに」

村人たちは、申し合わせておいたようにそう答えた。

村には活気が漲り、開墾された新田にも、ようやく黄金色の稲穂が頭を垂れていた。日吉村の民は、どこの村の民にも負けないほどよく働くと言われた。それは、ささやかながら胸の中に小さな夢を持つことが出来るようになったからだだった。

新しい流れを作った意宇川の第一期の大工事が完成して、二年の歳月が過ぎようとしていた。家正は四歳になった孫の彌兵衛の手を引き、いつものように意宇川の川土手に立っていた。



画 高田勲

まわりの田んぼには、一年前よりさらに多くの稲穂が実り、風を受けて、さわさわと心地良い音を立てた。ときどき、風に乗って流れるように飛ぶ赤とんぼが、お盆の近いことを告げていた。

幼い彌兵衛は、草むらの虫にすっかり夢中になっていた。

「なにやら空模様がおかしい。雲の走り方が尋常でない。風も出て来た。彌兵衛、急ぐぞ」「おじいさま、もう少し、ここにいては、いけませんか?」

「なにやら、いつもと違う。胸騒ぎを覚えてならん。彌兵衛、急ぐぞ」

家正は幼い彌兵衛を抱き上げると、小走りになり、家路を急いだ。

家正の悪い予感的中した。お盆を前にして、まる二昼夜、激しい雨が続いた。

増水した川の水は濁流となり、新しい意宇川の土手を越し、旧河川に築かれた堤防をも破壊した。百姓たちの、つい先程までの細やかな夢も一瞬のうちに幻と消え去った。日吉村の民は、ただ、呆然と立ち尽すのみだった。実りの無い、辛い復旧作業の中で、気持のやり場の無い民、百姓たちは、手の平を返したように不平や不満を露骨にぶちまけた。

「庄屋の旦那が意宇川の普請など思いつきなざらんかったら、こんな酷いことにならんかったのに……」